るもい風土資産カード

留萌港

世界の貨物船や客船も入港する道北圏の流通拠点港

道北圏の流通拠点港として、国の重要港湾に指定されている留萌港は、昭和8年（1933年）3月、着工から足掛け24年の歳月を経て開港しました。昭和11年（1936年）には国際貿易港に指定され、同年２月に中国汽船永原丸が外国船として、初めて入港。平成８年（1996年）２月25日にはロシア船コリア・ミヤゴチン号の入港で記念すべき3000隻を記録しました。古丹浜地区の－10m岸壁、三泊地区の－12m岸壁は外国からの大型貨物船や客船を受け入れる重要な役割を担っています。

留萌港築港の歴史を振り返ると、そこには地元の人々の熱意と一人の外国人技術者の言葉がありました。明治20年（1887年）、道庁が港湾調査のために招いたイギリス人技師、C.Sメークが報告書の中で述べた「天塩海岸では増毛より留萌はまだ未発達だが、もしも120万円かけて留萌の海岸を修築すればよい港になるであろう」という一文をきっかけに、地元有志が立ち上がり、大日本帝国議会に留萌築港の請願に行ったのが明治24年（1891年）。この請願は議会の解散で水泡に帰しましたが、その中の一人、地元の資産家として知られた五十嵐網治と網治の養子、五十嵐億太郎がその後、築港へ大きな影響力をもたらしました。億太郎は志半ばで病に倒れた網治の「鉄道も港湾もこれからだ。私の考えていたことを立派にやり遂げてくれ」との遺志を継ぎ、築港実現に向け、あらゆる手を尽くしたのです。当時、増毛との争奪戦となっていた留萌に築港が決定したのは明治43年（1910年）。私財を投げ打ってまで留萌の発展に寄与した五十嵐家は留萌港の歴史を語る上で、欠かせない存在と言えます。

五感で感じる！風土資産の魅力

聴く　触わる　味わう　嗅ぐ　知る

嗅ぐ

日本海有数の漁業の町、留萌では一年を通して、さまざまな魚介類が水揚げされます。エビ、タコ、イカ、ニシン、カレイ、ホッケ、アワビ、ウニ…冬はコマイやタラ、ハッカクなど、港の周辺はいつも磯の香りに包まれています。

知る

留萌港が一望できる留萌市礼受町の千望台には五十嵐億太郎翁立像が建っています。昭和59年10月に建立された「五十嵐億太郎翁彰徳碑」には億太郎翁の功績が記され、港の完成を待たずにこの世を去った億太郎翁の像が高台から留萌港を見守っています。

令和２年７月、留萌港を中心とした地域の振興に向けて「みなとオアシスるもい」が登録されました。代表施設である船場公園（るしんふれ愛パーク）は「道の駅るもい」も登録されており、留萌港と陸地が一体となった地域の活性化が期待されています。

見どころ

留萌港大町地区には世界的にも珍しいブロンズ像のデザイン灯台「波灯の女（ひと）」が建っています。6.65mの高さから14カンデラの光を沖合5kmにわたって照らすこの灯台は平成19年7月に市民によって寄贈されたもので、観光モニュメントとしての役割も果たしています。

ポイント

24年の歳月を掛けた留萌港築港の裏には、きっかけとなった一人の外国人技術者の言葉と、地元の人々の熱心な働きかけがありました。

■基本情報（R7.3）

港　　格：重要港湾
港湾管理者：留萌市